

香風家に兄がいたら  
.....

whitebait

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

オリ主とごちうさのキャラたちによるほのぼのゆるふわコメディ!?  
基本は原作と同じ感じに進めるつもりです。

# 目次

第1羽	この街とこの家と新しい生活	1
と	——	1
第2羽	ひと目で尋常でないもふもふだ	13
と見抜いたよその1	——	13
第3羽	ひと目で尋常でないもふもふだ	23
と見抜いたよその2	——	23
第4羽	ひと目で尋常でないもふもふだ	43
と見抜いたよその3	——	43
第5羽	小麦を愛した少女と小豆に愛	52
された少女その1	——	52
第6羽	小麦を愛した少女と小豆に愛	63
された少女その2	——	63

第7羽 小麦を愛した少女と小豆に愛  
された少女その3  
——  
80



# 第1羽　この街とこの家と新しい生活と

初投稿で駄文だと思うのですが  
頑張りますので

気長にお付き合い下さい

---

オリキャラの設定

香風怜央

かふう れお

15歳 高一

8月7日生まれ

180cm

85kg

高身長で筋肉質

勉強が出来て料理も出来る

香風家長男

基本的に温和でツツコミにまわることが多く

ラビットハウスでは料理を担当している

理由は人と話すのが苦手だから

趣味は料理と筋トレと読書で休日はもっぱら部屋で勉強をするインドア派なためコアのテンションについていけないこともしばしばある。

中学は3年間バスケットをやリ全国にも行くほど上手いと言われるが高校ではやる気は毛頭ないらしい(本人談)

バスケットをやると人格が変わり闘志を全面に出すプレイスタイルなのもありあまり好きでは無い。

ちなみにポジションパワーフォワード

---

ガタンゴトンガタンゴトン

今作の主人公である。

香風怜央は電車で揺られながら、本のページをめくりながら、頭にはヘッドフォンをつけクラシックを適当流している。

3年ぶりに実家のある木組みの街に帰るため電車に乗っている。

親父達に我儘を言い、全寮制の中学に入学し、木組みの街を離れて生活をして、

『都会を見て色々なもの感じて今後の経営に生かそうと思うんだ後は人見知り直しに……』

このように家族を説得して入学した。

親父と爺ちゃんには本当の理由もちゃんと話したが……

高校はまた木組みの街に帰ることを条件に親父達も納得してくれた。

そして今久しぶりに木組みの街に帰る電車の中にいる。

本の区切りがいい所で付箋を挟み外を眺めてみる。

駅に着きそこからまたしばらく歩きやつと目的の場所について思わず声が漏れる。

「やつと着いた〜」

3年ぶりの生まれ故郷で3年ぶりの我が家なのだ。

ワクワクして思わず心がピョンピョンしそうになっている自分がいた。

「開店してるしこっから入るかな〜」

小さい頃は裏口からこつそり入ることもあったが、

久しぶりの我が家ということで入口から正面突破しようと思つた。

そう覚悟を決めるとドアを思いつきり開け大きな声で一言。

「たーだーいーまー」

しかしおかえりとは返つてこず

「誰だ！／誰ですか？」

そこには少し大きくなつた妹と見知らぬツインテの少女が制服を着て働いていた。

その声の後、すぐにもう一人俺とよく似た顔の男がバーテンダーの格好で奥の扉から  
でてきて一言。

「おかえり忪央」

見知らぬツインテの子は天々座理世と言ひラビットハウスでバイトをしているらしい。

「いやーまさかチノに兄貴がいたとはな。」

リゼはコーヒーを渡しながらそう言つた。

「一瞬兄さんだとは気づかなかつたよ。」



チノは少し嬉しそうなのが見てわかる。久しぶりに兄に会えたのだ無理も無い。しかしチノは不思議そうな顔になり質問した。

「兄さん帰ってくるのは明日のはずじゃないの？」

「え？ 今日帰るって親父には伝えたよ？」

「お父さんからは明日と聞いていました。」

2人で親父の方をじつとみると親父は笑いながら。

「サプライズってやつさ。」

タカヒロは笑顔で2人に返した。

「チノ明日来るのはここに下宿する人だよ。」

「そうでしたか。」

「ちよつと待つて俺その話なんも聞いてないんだけど？」

一切知らない情報が出てきたので怜央はまたじつと親父を見る。

「お前に話したら帰ってくるのを嫌がりそうだから黙っておいたのさ」

チノの頭のティッピーが頷いているのを見て怜央は

（じいちゃんもそう思ってるのね……）と思った。

「楽しそうだしいいじゃないか？」

リゼは不思議そうに聞いてくる。

「兄さんは人見知りで初対面の人には警戒しまくりなんです。」  
「なるほどな。」

リゼとチノが怜央の方チラツツと見てチノが一言。

「兄さん落ち着いてください」

「どうしたんだチノ？急に落ち着けだなんて」

リゼはまた不思議そうにチノに聞く。

「やっぱりですか兄さんはほぼ間違いないリゼさんを警戒しています。」

「……」

無言のままコーヒー飲むことしか出来ない怜央にやれやれと呆れるチノ。

「兄さん、人見知りは中学で直すとか言っただけでなかった？」

怜央プルプル震えながら呟いた。

「チノのそれ以上何も言うな……」

リゼは苦笑しながら言う。

「歳も近いんだし警戒する事ないんだぞ？」

「そうゆう問題じゃないんですよ!!全寮制の男子校に3年もいたんだよ？直ったさ直ったとも!!でも女の人には相変わらずだよ!!」

大人しそうな怜央からの意外な大声にリゼは少し狼狽える。

「そ、そういうものなのか？」

「そういうものなのです。」

怜央はリゼの質問にすぐ答えた。

そして小声で更に続けた。

「それに天々座さん可愛いし……」

「ん？今なんて？」

「ナンデモナイデス。オキニナサラズ」

怜央は超渾身のとぼけ方をした。

「片言だと尚更気になるぞ？」

しかしリゼには効果がなかった。

チノは苦笑しながら呟いた。

「少しは直ったようですね。」

「これでか!？」

リゼのツツコミは最もなのだがここにいる人間はリゼ以外過去のレオを知っているのだ。

これより何倍も酷い人見知りのレオを。

「はい。小さい頃はこれより酷かったんですよ。」

「だいぶマシになったじやないか。」

怜央は深く頭を下げ挨拶をした。

「ア、ハハハハ、コホンこれからよろしくお願いしますね天々座さん。」

「リゼでいいぞ？それに天々座さんとか他人行儀すぎるし。」

「わかりましたリゼ……さん」

「若干違和感があるんだが。」

「もう少し時間をくださいお願いします。」

切実そうに言う怜央にリゼは諦めるしかないと思った。

「わかったよ。慣れるまで待つき」

「ありがとうございます。リゼ……さん」

「まただな」

リゼは苦笑しながらふと思った。

（今更だがチノの奴怜央と会話する時だけ敬語が無くなっているよな。昔はチノも敬語で話して無かったんだなきつと）

そんなこんなで

あつという間に1日が過ぎた。

夜になりキッチンには鼻歌を歌いながら野菜切るレオの姿とそれを不安そうに見るチノの姿があった。

「兄さんのご飯なんていつぶりなんだろうね？」

「どうだったかな初めてじゃないかな？」

チノは少し笑いながら言った。

「そうだよね昔は『料理なんてめんどくさい』って言ってたのにね」

「えーとそうだったけ？」

「そうだよ」

「安心しな3年でチノを唸らせるほど上手くなったからさ。」

自信満々に言う怜央は少し頼もしく見えたチノだった。

「いただきます」

お父さんとティッピーはパーティタイムで働いているため兄さんと二人きりの食卓だ

「この味噌汁とても美味しい」

「そりゃよかった。」

兄さんの料理が格段に進歩している。

家を出る前は私よりも料理が下手だった兄が気がついたら私より上手になっている。  
兄さんの作った献立は

・焼き魚

・ワカメとお豆腐のお味噌汁

・小松菜のお浸し

・ご飯

・野菜炒め

どの食材も丁寧に下処理がされていて

とても美味しい。

私は疑問に思ったことを兄さんに聞くことにした。

「どうやってこんなに上達したの？3年前は包丁で野菜を切るのも危なかったのに。」

兄さんはドヤ顔で言った。

「接客したくないからだよ」

人見知りを直すために中学に言ったんでしょ。と言うと兄さんはアハハと笑った。

でもこの味なら料理は任せられそうだね。

嬉しいけど兄さんと一緒にホールの仕事しなかったな。

## 翌日の早朝

ジャージに着替えた怜央は外を走っていた、中学時代から日課のランニングだ。

中学で部活をガッツリとやった為か、かなり筋肉質になり早朝に走る事が習慣となっている。

(木組みの街やっぱり懐かしいな)

そんなことを考えながら怜央は走っている、考え事をしながら走るとどうなるか答えは簡単だった。

「迷った…」

携帯走るのに邪魔だと置いてきたため手元には無い。

時計はまだ7時前だが早めに帰らないと行けない。理由は今日から早速ラビットハウスで働くのだ。その為には家まで帰らないといけないのだが、迷った怜央の考え出した答えはこうだ。

「駅まで走りそして駅からラビットハウスまで走る。」

駅は大きく看板等で行き方も何となくわかるので諦めずに向かうことにした。

「疲れた」

シャワーを浴びながら

怜央は呟いた

怜央が家に着いたのは迷ってから3時間後である。つまりは10時前である。

チノから心配された後に怒られ父親と祖父からは呆れられたのである。

「3年で土地勘って案外無くなるのね。」

自分の不甲斐なさをポヤキながらバータイムの服に着替える。

「さあ今日からはじめましょか」

そう言いながら扉を開ける。



## 第2羽　ひと目で尋常でないもふもふだと見抜いたよその1

シャワーを浴び終えて着替え終えた怜央は店内に向かった。

扉を開けるとそこにはとチノが掃除をしていた。

「遅いよ兄さん。外の掃除をお願いね。」

「はい……お待たせしました」

遅れてきた事にチノはまだ怒っていた。妹の機嫌をどう取るか考えながら外の掃き掃除をする。

「おはよう怜央」

「おはようございませすリゼ……さん」

まだぎこちない挨拶に戸惑うリゼを他所に怜央は聞いた。

「リゼ……さんはお昼食べましたか？」

「?まだ、食べてないぞ」

「なら掃除が終わったら作るので待っててください。」

「?そうかわかったよ。」

なぜ聞かれたのかわからないという顔をしつつも納得しリゼは店に入って行った。妹のご機嫌を取るついでに昼飯を済ませようと考えた怜央の顔は少し悪い顔をしていったという。

---

掃き掃除を終え店内に帰ってきた怜央はキッチンに向かい少し早めの昼飯を作っていた。

やはり妹の機嫌を美味しいもので取ろうとしている自分が少し嫌になりつつ昼飯の仕上がりに入る。

「どうぞ。ナポリタン2つね」

「おお…美味そうだ」

「リゼさんもきつと気に入ると思いますよ。」

「召し上がれ」

「いただきます」

2人とも美味しそうにナポリタンを食べ始めた。

「これは…私より美味しいな」

「接客をしたくないから頑張りました」

「そんな理由でか!？」

「そんな理由って言わないでください。リゼさんこつちとしては死活問題なんです。」

「そうなのか…それより名前違和感無く言えてるな」

「寝る前に100回くらい練習しましたのでやっとなのですが」

「そんなにすることか!？」

「仲良くなりたいたので…」（小声）

「なんで言ったんだ？声が小さくて聞こえなかったぞ？」

「キニシナイデクダサイ」

会話を聞いていたチノが口を開いた。

「リゼさんとは普通に話せるんですね」

チノが少し安心した顔で言う

「年上だからまだ話しやすいとかそんなんじゃないか？」

「実はSAN値が減ってます。」

「SAN値が減るってなんだ!」

リゼのツツコミが響くと同時に金が鳴る。

そろそろ店を開ける時間だ。

「俺は足りない食材とかを買いに店に行くよ」

「また迷子になるんじゃないか？」

「なぜリゼさんがそれを？」

リゼは少し呆れ気味に言った。

「お前の料理を待つ間にチノから聞いたぞ。走りに行つて迷子になるなよな」

「今度は流石に携帯を持っていきますよ。」

チノは買い物メモとお金を手渡ししながら言った。

「兄さんならまた迷子になりかねません。それと無駄遣いしちやダメですよ？」

「俺の信頼は0ですかそうですか。まあ早めに帰つてくるよ。」

怜央は落ち込みながら買い出しに向かった。

「それじゃあ私は着替えてくるよ。」

「はいわかりました。」

リゼが更衣室に行く扉が閉まると同時くらいに、

ラビットハウスのお店のドアが開く。

「うっさぎ♪うっさぎ♪」

「いらっしやいませ…」

赤みがかった金髪の髪色の女の子が入店してきた。その子は店内を見て叫んだ。

「うさぎがない!？」

(なんだ……この客)

「……もじゃもじゃ」

「……は？」

チノはティツピーに触りながら尋ねた。

「これですか？」

「これはティツピーですー応うさぎです。」

チノはその子を席に案内した。

「ご注文は」

その子は少し食い気味に

「じゃあそのうさぎさん。」

「非売品です。」

チノはキツパリ言った。

その子はガタツと音を立てながら立ち上がり叫んだ。

「じゃあせめてモフモフさせて!」

「コーヒー1杯で1回です。」

「じゃあ3杯!!」

チノは注文を受けコーヒーを入れる。その様子をティップピーは揺れながら眺めている。

「コーヒー3杯頼んだから3回触る権利を手に入れたよ!」

コーヒーカーツプが3つありそれぞれに別のコーヒーが入っている。

彼女はその1つを手に取り飲んだ。

「この上品な香り!これがブルーマウンテンか!」

「いいえコロンビアです」

彼女はカップを置き別のカップを手取る。

「この酸味……これがキリマンジャロだね」

「それがブルーマウンテンです」

彼女はカップを置き最後のカップを手取る。

「安心する味!これがインスタントの……」

「うちのオリジナルブレンドです……」

「はあくモフモフ気持ちいいくいけないよだが……」

ティップピーをモフリながらふにやふにやした顔になる彼女。彼女がよだれを拭いた瞬間、店内に叫び声が響いた。

「のおおおお!」

その叫び声はかなりダンディだった。

「あれいまこのうさぎ叫ばなかった？」

チノはお盆で顔を隠しながら応える。

「気のせいです」

「そつかくそれにしてもこの感觸癖になるなあ」

ティツピーをモフモフする彼女するとまたダンディな声が店内にひびいた。

「ええい早く放さんかこの小娘が！」

「なんか今この子にダンディな声で拒絶されたんだけど」

「私の腹話術です。それより早くコーヒー全部飲んでください。」

彼女はティツピーをチノに返し席に着く。そして語り出した。

「私、春からこの町の高校に通うの」

「はあ」

「でも下宿先探してたら迷子になっちゃって」

「道を聞くついでに休憩しようと思っただけど。香風さん家つてこの近くのはずなんだけど知ってる？」

「……うちです」

「え？」

「これは偶然を通り越して運命だよ！」

(いきなり運命を感じられた……というかやっぱり女の人だった兄さん大丈夫かな。)

そんなことを思いながらチノは自己紹介を始めた。

「私はチノです。このマスターの孫です。」

「私はココアだよよろしくねチノちゃん」

ココアと名乗る少女は笑顔で話を続けた。

「あと高校の方針だね。下宿させて頂く代わりにそのうちでござ奉仕しろと言われてるんだよ。」

「うちで働くということですね。といつても家事は私と兄がいてなんとかありますし、お店も十分人手が足りてますので。」

「何もしなくて結構です。」

(いきなりいらぬ子宣言されちゃった……)

「どうかチノちゃんってお兄ちゃんが居るんだね」

「今年から高校に通うために家に帰ってきたんです。」

「私と同一年なんだね。どんな人なのか楽しみだな」

ココアは目を輝かせていた。しかしチノは複雑そうな顔をしていた。

(こんなに楽しみにされると人見知りで警戒されますよなんて言えない。)



「どうしたの？」

ココアは不思議そうに聞いた。

「なんでもありません。」

「そっか、とりあえず挨拶がしたいんだけどこのマスターさんは留守？」

「祖父は3年前……」

「そっか今はチノちゃん1人で切り盛りしてるんだね……」

「いえ、父や兄もいますしバイトの子がもう1人……」

チノが話終える前にココアはチノに抱きついた。

「私を姉だと思って何でも言っただからお姉ちゃんって呼ん「じゃあココアさん」

「お姉ちゃんって呼んで」

「ココアさん」

「お姉ちゃんって呼んで」

「ココアさん早速働いてください。」

「任せて♪」

チノはココアを更衣室に案内する。その間ココアは終始キョロキョロ周りを見ていた。

「ここが更衣室でこのクローゼットを使ってください。制服持ってきますね。」

「わーい制服着られるんだね♪」

## 第3羽 ひと目で尋常でないもふもふだと見抜いたよ その2

怜央は携帯を駆使し迷子にならずに何とか帰ってきた。

「ただいま〜」

「兄さんおかえりなさい。下宿する人はもう来てるから挨拶してね。」

「了解。」

「やっぱり女の子だよね?」

「兄さん……女の人だったよ。」

落胆する怜央

「そうか……」

下宿すると言うことは一緒に住むってことだよな……

仲良くなれるかな大丈夫かな……等とボソボソつぶやき、うなり暫くしてから怜央は尋ねた。

「チノから見てどんな人?」

チノは怜央が来るまでの出来事を思い出す。

「……………変な人？」

「なぜ疑問形なんだ？というか俺に聞くなよ……」

怜央は秋れながらキッチンに向かう。

「まあいいや買ったもの閉まってるぞ」

「わかったよ。私はリゼさん達を呼んでくるね。」

そういうとチノはまた奥に戻って行った。

「なあじいちゃん」

「なんじゃ怜央」

「じいちゃんから見ても、下宿する子はどんな子に感じた？」

怜央の声音はとても不安そうで顔は少し暗かった。

「安心せい仲良くなれるはずじゃよ。まあお前さんやチノとは真逆で活気に溢れる小娘

じゃがな。」

ティツピーは震える子をあやす様な優しい声音で続けた。

「お前さんも成長したのじゃろ？なら少しづつ変わっていけるはずじゃ。」

ふおっふおっふおっふとティツピーは笑った。

その言葉を聞いた怜央は少し安心した。

そして怜央は笑いながら言った

「はずって……頼りねえなじいちゃん」

「なんじやと!!」

「うそだよ。ありがとな。それにしてもやつぱり違和感が凄いな。じいちゃんの声がティップーからするの……」

そんな会話をしていると扉が開く音がした。

「チノちゃんのお兄ちゃんはどこかな?」

「兄は今キッチンにいるはずです。」

「怜央は買い出しに行つてたんだよな?」

3人の女の子の声が聞こえた。

キッチンからチラツと店内を覗く怜央。その足は産まれたての子鹿のようにプルプル震えていた。

「兄さん……隠れてないで出てきてください。」

「……」

「チノちゃんが兄さん呼びしてる!」

「相変らずだな……」

チノとりぜは呆れ、ココアは驚いている。

チノはキッチンに向かい高校生男子とは思えないほどプルプル震えている兄をキツ

チンから引つ張り出した。

「チノちゃんのお兄ちゃんは君だよね？名前は何？」

「香風怜央って言います。」

怜央の声は恐らく誰にも届いてない。

それほどまでにか細く小さい声だったのだ。

そんな兄を見かねてチノが紹介する。

「兄さんの名前は香風怜央と言います。」

「じゃあ怜央君だね!!」

ココアは嬉しそうに言った。そしてココアは握手をするため怜央に近づこうとした。

その瞬間怜央はチノの後ろに隠れたながら震えている。チノより大きい怜央が隠れるはずがないのに隠れようとしている。

「え？」

ココアは呆気にとられた。

自分よりも身長が高い男性が自分よりも小さい女の子の後ろで震えているのだ。

「兄さんココアさんが驚いているので隠れるのをやめてよ。」

「私なにかやっちゃったかな？」

ココアは不安そうに尋ねた。

「ココアさんはなにも悪くないです。ただ兄は人見知りで警戒心がすごいだけなんですよ。」

「人見知りつてレベルじゃないよ!？」

「あはは……というか私の時より酷くないか？」

「リゼちゃん時はどんな感じだったの？」

「そうだな。コーヒーカップを持ちながら無言で震えていたぞ。」

「兄さん立つてください。隠れないでください。私を盾にしないでください。」

「チノに怒られた。」

怜央は落ち込みながらチノの後ろから移動した。

「私の名前はココアって言うのよろしくね怜央君。」

「よろしくお願いします。命だけのご勘弁をお願いします。食わないでください。」

「私をなんだと思ってるの!？」

「今日から下宿する女の子。」

「これから一緒に生活するわけだし私は仲良くしたいな？」

「……す」

怜央は消え入りそうな声で何か言っている。

「なんて言ったの？」

ココアは聞き返した。

「……………いです」

「なあチノなんて言ってるんだ？」

「私にもわかりません…………」

怜央は大きく深呼吸をして照れながら言った。

「仲良くしたいです!!」

「じゃあこれから友達だね!!」

「よろしくお願いします。ココア…さん」

「もう〜同級生なんだから呼び捨てでいいよ?」

「勘弁してください。少しずつ変えていくので今これで許してください。命を取らないでください。」

ココアは大きな声でツッコんだ。

「命は取らないよ!」

怜央は震えながらリゼに助けを求めた。

「リゼさん助けてください!!」

リゼは呆れたながら応えた。

「私に振るなよ…………」



チノは3人の会話が終わりそうにないのを察して怜央達に仕事を頼んだ。

「兄さん荷物が裏にあるからココアさん達とキッチンまで運んでくれる?」

「はい」

「切り替え早いな……」

「切り替えないとまたチノに怒られるので……」

「わかったよチノちゃん。リゼちゃん怜央君行くよ!!」

怜央は先頭を切りドアを開けて入って行くココアを見ながらリゼ聞いた。

「リゼさんココア……さんは荷物の場所わかってるんですか?」

「恐らくわかってないな……」

「この先が不安になってきました。」

「まあそういうなよ。ココアは良い奴だぞ。きつと」

「きつとなんですか……」

リゼと小話をしているとstaff onlyの表示が下げられたドアが開いた。

「荷物ってどこにあるのかな?」

全員が一斉に同じことを思った。

「「「やっぱりか/やっぱりですか/やっぱりそうですか」」」

全員口に出していたことに言い終えてから気づいた。そしてココアはまた大きな声で

ツッコミを入れた。

「やっぱりつてなに!？」

「「なんでもないぞ／なんでもないです／ナンデモナイデスヨ」」

3人が3人それぞれ白を切る。だが怜央だけはカタコトで分かりやすかったがココアはあまり気にしていなかった。

「そっかならいいや。早く行こ!!」

「ココア：さんは元気ですね。」

「うん!!元気が1番だからね!!」

「そうですか。」

「だから怜央君も元気出していこう!!」

「元気は中学に置いてきました。」

「えー」

「嘘をつくな!!」

「皆さん仕事をしてください。」

3人は返事をリゼを先頭にして荷物を運ぶために荷物がある場所へ向かった。

チノに言われた荷物は運び終えのだが俺は少し気になることがあったりした。

(リゼさん絶対荷物運ぶ時手を抜いてたよな……)

3年も運動部にいたら相手が手を抜いているかや、やる気の有無はわかるものだ。  
(怜央だけです)

ココアさんが言っていた『これは普通の女の子にはキツイよね』って言葉を聞いてから明らかに手を抜いているとわかったのだがまあ気にしないでいつか。

あまり詮索すると痛い目を見そうなので止めておくことにした。

「ココア、メニュー覚えとけよ。」

リゼさんがメニュー表を手渡す。

ココアさんがメニュー表を開いたので俺はその上から距離を取りつつ覗き込むように見る。

「コーヒーの種類が多くて難しいねー」

「3年前と変わってねえな〜」

3年もメニューが変わってないのはいい事なのだろうか？

「怜央君はコーヒーの種類とか覚えてるの？」

「はい。子供の頃は手伝ってたのでね。」

「リゼちゃんは全部覚えてるの？」

「私は一目で暗記したぞ。」

「すげえや」

「すごいつ」

「訓練してるからな。」

俺でも覚えるのに1週間かかったのにリゼさん頭良いんだな。羨ましいぞ。コーヒーに関してはチノの方がすごいでしょ……

「チノなんて香りだけコーヒーの銘柄当てられるし」

そう我が妹はコーヒーの香りだけで銘柄がわかるのだ。俺も多少わかるがチノほど正確では無い。

「私より大人っぽい」

「ただし砂糖とミルクは必須だ」

「あつなんか今日1番安心した!!」

なんか微笑ましい会話だな。それに3年前から変わっていないので思わず笑ってしまった。するとチノが頬を膨らませて怒った。

「兄さん、笑わないでよ……」

「ごめんごめん」

「怜央君はなにか特技とかあるの？」

「特技ですか？」

「兄は私と違って運動が得意です。」

「運動出来るんだ〜」

「なんか男子って感じだな。」

運動は好きだが得意という訳では無い。

中学の頃に筋トレにハマってから身体を鍛えることは好きだが特段プロを目指している訳でもない。

「中学の成績ではいつも体育だけ一番高かったんですよ。」

他はあまり良くないので聞かれたくない。

「そうなんだすごいね!!」

ココアさんそんな輝いた目でこっちを見ないでください。そんなに見てもなにか、今ここで出来るわけじゃあないんです。

「なるほどな。だから朝走っていたのか？」

「はい。部活の朝練で走っていたので癖ですね。」

朝から15キロ走る部活とか正気じゃないと入部したては、思ったが強豪校だったししょうがない。

「ちなみにどのくらい走ったんだ？」

「迷子になるくらいですから距離とかわかりません。」

苦笑しながら言った。

「それもそうか……」

「まあ3時間は走ってましたけど……」

「すごい体力だな……」

「そうですね？」

「いいな。私もなにか特技があつたらな」

体力があるのは特技になるのだろうか？

男子なら街を3時間走りっぱなしでも平気だと思う。強豪校に入ればみんなこんな

もんだ。（怜央の個人的な感想です。）

というかずつと気になっていたのだが……

「チノお前は何持つてんの？」

妹がなにかノートを持っている。

「これは春休みの宿題だよ。空いた時間にこっそり進めてるの。」

ココアさんがチノのノートを覗く。

「あつその答えは128ですその隣は367だよー」

なんかめつちやスラスラ答えるやん。ココアさんつてもしかして数学できるのでは

?

「……ココア、例えば430円のブレンドコーヒーを29杯頼んだらいくらになる?」

「12470円だよ」

え?今すぐえサラツと言ったよ。

「私もなにか特技があつたらな」

ココアさんつてアホの子そうに見えて意外な特技を持つてるんだなと失礼ながら思った。

---

そんなこんなでラビットハウスは開店した。

カランカラン

店のドアが開いた。

「いらっしやいませー♪」

怜央はキッチンにいるため挨拶はしない。というか出来ない。

「おや新人さん?」

お客さんの質問にココアは元気よく答える。

「はい今日から働かせて頂くココアっています。」

「よろしくね。キリマンジャロをお願い。」

「ふーんちゃんと接客できてるじゃないか」

「心配ないみたいですね」

「やったー！私ちゃんと注文取れたよー！キリマンジャロお願いします!!」

「あー」

「えらいえらいです。」

怜央はキツチンから聞いていて思った。

（ココアさんってやつぱりアホの子？）

少しして客が居なくなるとココアはチノに尋ねた。

「チノちゃん、この店の名前って名前ってラビットハウスだよ。うさ耳つけないの？」

「ウサ耳なんてつけたら違うお店になってしまいます」

怜央は思った。（男のウサ耳ってそんなニツチな需要だよ。）しかしやるわけないとわかってるので怜央は考えるのをやめた。

「リゼちゃんとかウサ耳似合いそうだよねー」

「そんなもつけるか」

そう言いながらリゼはウサ耳+αを装着している自分を想像して叫んだ。

「露出度高すぎだろー！」



「ウサ耳の話しかしてないのに」

(ナニを想像したんだろう？ウサ耳付ける時に露出度とか気にするのかわ？) 男子校出身の怜央はリゼがナニを想像したか察しが着いたが黙っていた。

ちなみに少しチノも照れていた。

「教官！じゃあなんでラビットハウスなのでありますか！サー！」

「そりやティツピーがこの店のマスコットだからだろう？」

「うーんでもティツピーうさぎっぽくないよ？もふもふだし」

「じゃあどんな店名がいいんだ？」

ココアは指をビシツとやりながら叫んだ

「ズバリ!!もふもふ喫茶!!」

「そりやまんますぎますよ。」

「もふもふ喫茶……」

「チノが目を輝かせてるよ……」

「気に入った!?!」

そんな会話をしながら、リゼはコップに何かを入れて準備をしている。

「よしココアラテアートやってみるか？」

「らてあーと？」

「カフェラテにミルクの泡で絵を描くんだよ、この店ではサーブिसでやってるんだよ。」

「あつ絵なら任せて！これでも金賞もらったことあるんだよ。」

「町内会の小学生低学年の部とかいうのはナシな」

「……」

玲於は思った。（凶星なんですね……）

「まあ手本としてはこんな感じに。」

そこにはミルクで上手に描かれたネコ、クローバー、ハートのラテアートがあった。

「わっ！すごい上手い！」

「そ、そんなに上手いか？」

「すごいよーリゼちゃんって絵上手なんだね！ね、もう一個作って」

「しよ……しようがないなー！特別だぞ！」

「ほーんと!？」

「やり方もちゃんと覚えろよー！」

そう言うとりゼは真剣な表情になった。

ミルクを少し注ぐとコーヒーカップを、空中で素早く一回転させコーヒーカップをキャッチするとそのまま頭の上からミルクをカップに正確に投下する。

ミルクポットを強くカウンターに置きそのまま金属製のマドラーに持ち替えペン回

しの要領で回し、気合を入れる。

「うおおおおお!!」

リゼはその気合いを全てマドラーに乗せ凄まじい勢いでカップの中を混ぜていく。

「出来た!!」

「うわぁー!上手い!!」

怜央はリゼの一連の動きを見ながら思った。(あの動きはなんなんだ?そもそも人間業かあれ?) ツツコミたい気持ちを抑えて会話聞くことにした。

カップの中には今に動き出しそうな砲塔から煙の出る迷彩柄の戦車が描かれていた。

「全くそんなに上手くないって、私なんか!」

「いや……上手いってレベルじゃないよっていうか人間業じゃないよ……」

「よーし私もやってみるよ!」

「がんばれー」

「う……なんか難しいイメージと違う」

「どれ見せてみr……」

ココアのラテアートをのぞきこんだリゼはラテアートを見た瞬間心を打たれた。そう、ラテアートの可愛さに!!

(か、かわいい!)

リゼはラテアートが可愛くてプルプルしているがココアはそうは思わなかった。  
(わ、笑われてる!?)

「もー!」

「チノちゃん達も描いてみて!」

「私もですか?」

その会話の中に、そそくさと逃げようとする怜央。

「……どこに逃げる気ですか? 兄さん?」

「怜央君も描いてみてね!」

「はーい」

「諦めたな……」

チノはテキパキとラテアートを描いているが怜央は違った。

「リゼちゃんどんなのができるか楽しみだね」

(あれ、怜央のは知らないが、確かチノの描くラテアートって)

「出来ました」

「俺も一応……」

「……これは……」

チノのラテアートには、まるであの長すぎてフルネームを覚えた人も少なくないであ

ろう作家の絵画のような前衛的な人の顔だった。

一方怜央の方は、正直なにが描いてあるかわからないようなミルクとカフェラテが混ざったナニカがあった。

「怜央くんもチノも仲間ー!」

「仲間?」

「チノのは多分違いますよ?というかなチュラルに手を握ろうとしないでください。魂が抜けます」

「怜央君って、手を握っただけで魂抜けちゃうの!?!」

「ココア、そう意味じゃないぞ?それとちがうぞココアチノの絵を私たちのと一緒にしちゃ」

そんなこんなで時間は過ぎた。

「じゃあ今日はそろそろお店を閉めましょうか」

「おつかれさまー♪」

「おつかれー」

「おつかれっしたー」

「じゃあ俺は自室で着替えるんで」

怜央は頭を下げながら自室に向かった。

「怜央君が着てるの制服だよな？自室に持ってちやつて大丈夫なの？」

「兄は昔から着替えは自室してますし、あれは父がもう着なくなつたのがあつたので父があげたそうです。」

「そうなんだー！」

「チノのお父さんも案外、ガツシリしてるもんな」

そんな女子トーク？をしながら更衣室に着いた。

「ココアは今日からこの家で寝泊まりするんだよな」

「うん、そうだよー」

「チノちゃん今日の夕飯一緒に作ろうね」

「一人でも出来ますし、兄もいますので。」

「えー怜央君だけじゃなくて私も手伝うー」

「大丈夫です」

「一緒に台所立とうよー」

(なにそれ……楽しそう)

リゼはそう思った。

## 第4羽　ひと目で尋常でないもふもふだと見抜いたよ その3

リゼを見送り台所に立ち晩御飯を作るチノ。

ちなみに怜央は自室で夕飯が出来るまで勉強すると言っていた。

「夕飯はシチューでいいですか？」

「野菜切るの任せて！」

「いえ、一人で大丈夫です。」

ココアは少し落ち込んだ後に何かを見せようとする。

「チーノちゃん！」

「はい？」

「じゃじゃーん!?!」

「これ…」

「さつき密かに作ってたんだー」

「私達…」

ココアがチノに見せたのは、1つのラテアートは、丸からツイントールのような二つ

の突起が出ており、キリっとした表情の顔。

1つラテアートは、緩みきったような表情の顔で周りに花が咲いていた。

1つのラテアートは、丸を二つくつついて上はうさぎの顔で下はちよつと眠たげなたれ目の顔のラテアート。それから顔がなんとなくクール系っぽい顔の周りにはダンベルらしきものがいくつかあった。

チノが見とれていると、ノックの音がしてドアが開いた。

「……怜央君？」

「違いますよ……こちら父です」

「怜央は帰ってきてからますます俺似てきたから間違えるのも無理はないさ」

チノは作業を中断しタカヒロの方に駆け寄ると。

「君がココア君だね、この家も賑やかになるな、今日からよろしく」

「あ、お、お世話になります」

「こちらこそチノと怜央をよろしく」

会話の最中流れるようにタカヒロの頭の頭の上に移動するティッピーを誰も気にしない。

「じゃあ」

「は、はい」



タカヒロが部屋を出るとチノは足早にキッチンへ戻る。

「お父さんは一緒に食べないの？」

「ラビットハウス夜になるとバーになるんです、父はそのマスターです」

「へえーそうなんだ」

「なんか裏世界の情報提供してそうでかっこいいね。」ココアはキメ顔でそう言った。

「何の話ですか？」

怜央は勉強が一段落つきりビングに向かった。

「チノー飯できたー？」

「」もうすぐだよ兄さん／もうすぐだよ怜央君」

「はい、にしてもこうしているとホントの姉妹みたい」

「姉妹…ですか」

「ココアお姉ちゃん…：…ですね」

「もう一回言って!!」

「ココアさんが壊れた」

「お願いもう一回」

「……」

シチューを食べ終えた3人は怜央が皿洗いをしている間にチノはお風呂に入ること

になった。

「実家での皿洗い懐かしいな」

「久しぶりすぎるわー」

そんな独り言を言いながら絶賛ボツチで皿洗いをしている。

「どうか虚しいなこんなことを一人で呟いてると」

3年間寮生活の共同生活だったが、1年の入部したての時から練習後の『飯作りを全部やる』と宣言してしまったせいで、皿洗いとか、飯作る量の感覚がまだバグっている。この食事で明日大丈夫なのかと感じる。

相手は女子でしかも一人は妹である。育ち盛りはもう少し色々な食べないと、いけないと妹の今後を案じながら、皿を洗い終え自室に戻ろうかという時、ノックの音がしてドアが開いた。

「怜央いるか」

「どうしたんだよ親父」

パーティーで働いてるはずの親父が戻って来た、何かあったのだろう少し困り顔だった。

「客に久しぶりにマスターの演奏が聞きたいと頼まれてね、2・3曲合わせてくれないかなと思ってね。」

親父はジャスはこの喫茶店を過去にジャズで救った過去がある、俺もその時に一役買った身ではあるが、もうあれは無いはずだ。

「別にいいけどさ、俺の楽器はもう無いだろ?」

「そこは安心しろ、準備はしてある」

「は?準備してあるの?」

「細かいことは気にするな、客が待っているんだ行くぞ」

「やれやれ、チノに一声掛けてくる」

「わかった、待ってるぞ」

客には相変わらずあまいというか、サービス心大勢というか、そう思いながら俺は風呂場に向かった。

怜央が風呂場を訪れてからしばらく経ち、2人はお風呂から上がりチノの髪をココアが乾かしている。

「怜央君急にバータイムで仕事するからって言ってたけど、どうしたんろうね?」

「わかりませんが、きつと人手が足りなくなるほど忙しいのでしょうか」

「そっかー、そういえば、ティツピーは？」

「父と一緒にバーで働いてます」

「そっかーぎゅーとして寝たかったのになー」

「ティツピーは抱き枕じゃないですよ」

「じゃあチノちゃんぎゅーして寝ようかな」

直後ココアの顔にはうさぎのぬいぐるみの顔と熱烈なキッスをすることになった。

---

### リゼ邸のリゼの部屋

「聞いてくれよワイルドギース」

「今日新人が入って来てなー、こいつがなかなか変わったやつでさ、」

「練習用のラテアートが余りまくって大変だったよー」

「当分カフェラテは飲みたくないなー」

「……」

「寂しくない、寂しくないぞー！」

寂しそうなりゼであった。

怜央がとある上がったあとのバータイム

「やれやれ大変なことになりそうじゃ」

「チノと怜央仲良くなれるといいな」

「ココアと言ったか、あの娘あつという間に店になじんでしまった」

「チノや怜央にはああいう友達が合ってるのかもしれん」

「だがその勝手に抱きつかれると困るというか、わしもほら今はこんな身体だけどねー  
応アレだし……」

そう言いながらクルクルクネクネ動くティツピー

「なーんだ楽しくなりそうじゃねえか親父」

「ばかもん！お前にわしの気持ちかわかるか！」

リゼ邸のリゼの部屋に響くメールの受信音

「んメール？ココアからだ」

「あいつこんなの作ってたのか」

「壁紙にしておこう」

明日からもがんばろう……か

---

ラビットハウス

「はあ……」

ココアは何かを悩みながらため息をついた。

「ココアさん」

チノはそれを心配そうに見ている。

「シチューもう一杯おかわりすればよかった」

「そんなこと」

ココアはチノの方を向き話し出した。

「チノちゃん、この街とっても素敵だね」

「そう、ですか」

「うん、私この街に来てよかった」

「これからたくさん楽しいことがあります」

「ココアさんよろしくお願ひします」

「お姉ちゃんとして頑張るね」

「やっぱりちよつと待つてください」

「えー今日は一緒に布団で寝ーる」

（微笑ましいが俺はまだ勉強してんだよな……）

怜央は部屋の前を通りながらそんなことを思った。

## 第5羽 小麦を愛した少女と小豆に愛された少女その

1

ここは木組みの家と石畳の町。

私、ココアはこの町の高校に通うため、引っ越してきました。

下宿先のラビットハウスでバリバリ働いています！

妹も出来ました!!

「妹じゃないです」

「俺の妹ですよ？」

「この前お客さんに、ココアちゃんはシスターコンプレックスだねって言われちゃった」

「え」

「……」

「響きがかっこイイよね！」

「……………」

「シスターコンプレックスの意味わかってないやつだなこれ」

カウンター方に戻ってくるリゼに駆け寄るココア。



「リゼちゃん聞いてー私シスターコンプレックスなんだって」

「え!? あ、そ、そうか……」

「シスターコンプレックス♪シスターコンプレックス♪」

ココアは単語の響きが余程気に入ったようでリゼの前でうさぎのようにぴよんぴよん跳ねている。

「やばい……意味をわかってない……早く止めなきゃ」

「やれやれ」

「ココアさんってほんとに高校生？」

「どうでしょう……」

2人と1匹はココアの様子に諦めながら、ココアを見ていた。

春休みが終わり始業式の日となった。

怜央はうさぎ柄のエプロンを身につけながら朝食を作る。ノック音と共に扉が開いた。タカヒロだった、誰が入ってきたか察した怜央は手元を見たまま挨拶する。

「おはよう、親父朝飯はまだ出来てないぞ」

「おはよう怜央、今日はどうするんだいつもみたいに走るのか？」

「そのつもりだ、昼くらいまで」

「部活はどうするんだ？ 中学みたいにバスケットをするのか」

「約束があるし俺はこの店で働くよ、未練もちやんと中学に置いてきたよ」

ピーピーという音が響いた。

「米炊けたし、食ったら走ってくるよ」

「いつてらっしやい怜央」

「はえーよ親父、いつてきます」

「こんな朝のひとこま。」

---

チノとココアは一緒に登校するので玄関へ向かっていた。

「怜央君は悪い子だね、1日目からおさぼりさんだなんて」

「兄がそんな悪になっていたなんて思いませんでした」

「怜央には俺からも言っておくから」

玄関につきココアがタカヒロへ大きな声で。

「いつてきまーす！」

「いつてきます」

「ああ、いってらっしゃい、気をつけて」

ココアはタカヒロのいってらっしゃいに元気よく応えた。

「はい♪」

「チノちゃんも一緒の方向なんだ」

「こっちの方向なんです」

ココアはとても嬉しうな顔で言った。

「じゃあこれから途中まで一緒に！」

「行けますね」

ココアが喜びで微笑んだその直後だった

「では私はこっちです」

「早っ!？」

チノとココアの登校は一瞬で終わるのであった。

---

脳内で一人とある楽器の楽譜を思い出しながら走っている、走っていると暇になる。部活やってる時は、部活仲間と一緒に走ってたし虚しくはなかった。時計を見るとまだ

8時を少し過ぎたところ、

「ペースあげて無心で走るか」

今日も俺は考えるのをやめた。

しかし親父からメールが来たのでペースを緩めて返信をしていた。

「なんで高校入学式はどうしたって聞いてくんか？明日だつーの」

俺はなぜこうなったのか理由はわからないが責められている気がしたので忘れるためさらにペースをあげた。

---

時は12時過ぎたあたりの学校帰りの道

「よっすチノ」

「もう兄さんなんでジャージなの学校は？」

「なぜ怒ってる、ジャージは走ってたからだけど？学校ってなに？」

「だって今日高校の入学式でしょ？」

「明日だよ？」

「……………」

「どうしたチノそんな顔して」

チノは呆れた顔をしていた。

「ココアさんの今後が心配になっただけだよ」

「なにがあつたんだよ……」

「なんでもないよ？」

「あつそ、先帰ってシャワー浴びるわ」

「え……久しぶりに一緒に帰ろうよ」

「甘えん坊は治ってないな」

チノは照れながら言った。

「……うるさい」

「はいはい一緒に帰ってやるよ、可愛い妹の頼みだしな」

「兄さんのバカ」

「バカでいいよ、置いてくぞ？」

「……今行く」

「手を繋ぐか？」

「子供扱いしないで……」

「はい」

---

掃除をするココアすると扉が開く。

「ただいま」

ココアはチノと怜央を迎え入れる。

「ココアさん高校はどうでした？」

「この町って可愛い建物が多くて素敵だよね」

「高校は……」

「まるで童話の中の町みたいだよね」

「高校は……」

「それ以上聞かないでっ！」

苦笑気味に怜央がツツコミを入れる

「やっぱり知らなかったんですね」

「怜央君は知ってたの？」

「そりゃあまあ……」

怜央は目を逸らした。

「なんで教えてくれなかったの!!」

怜央は呆れ気味に言った。

「知ってると思うじゃないですか……」

怜央は駆け足で staff only の表示が下げられたドアに向かった。

「シャワー浴びてくるわ」

「わかったよ兄さん」

入学式を無事に終えた、俺はココアさんと別行動で帰っていた、俺は2人の同級生と一緒に遠回りをしながら、ココアは昨日迷った時に出会った千夜という女の子と一緒に、帰っているらしい。

3人の中で1番小さい、ブレザー姿の奴が喋り始めた。

「まさか3人一緒になれるとはな!!」

次に1番大きい奴が続いた。

「そうだね、僕も怜央と香助が一緒でよかったよ」

最後は俺だった。

「人見知りの俺としてはお前らがいるだけで楽だよ」

俺と一緒にいるのは、

赤褐色で少し前髪にかかるくらいで癖がなくメガネをかけていて落ち着いた目元の

青年、宇和田 世良。

黄緑色の髪毛でベリーショートくらいの量しかなく少し吊り目っぽい青年、茴井 香助だ。

「怜央、中学に人見知り治しに言ったんじゃあねえのかよ」

「僕もそう聞いていたよ？」

「男なら平気なんだよ……」

「下宿先の人って、同じ学校の名前は確か……」

俺が言う前に、世良が直ぐに答えた。

「保登心愛さんだね」

「そうそう保登さんと一緒なんだろう大丈夫なのか？」

ふと香助が疑問をぶつけてきた、そうすると世良も同調した。

「僕もそれは気になったね」

やっぱりそこ気になるよな……でもこれしかないんだよ。

「慣れるだろ……」

「やっぱり慣れか」

「やっぱりってなに？」

「さあな／さあね」



「相変わらず息びったりだね」

「ドヤア」

「ドヤ顔まで揃うのか……」

「まあな／まあね」

「はいはい……俺こつちだから」

「おうじゃあな怜央」

「バイバイ怜央」

「またあしたー」

こいつらがいるなら大丈夫だろ、高校生活が楽しくなりそうだな。

バイト中にココアがパンを作りたいと言い出した。

「大きいオープンならありますよ、おじいちゃんが調子乗って買ったやつが」

チノの上にいるティッピーが赤くなっている、照れたようだ。

キツチンには妙にでかいオープンがあるがそれは生前に祖父が買ったのだ。

今は怜央が勉強のお供を作るのに使っているくらいだ。

「ほんと!? 今度のお休みの日みんなで見板メニュー開発しない? 焼き立てパンおいしい

よー！」

「話ばっかしてないで仕事しろよー」

グウ〜リゼの腹の虫がなった。

「焼き立てって凄く美味しいんだよ！」

グウ〜もう一度腹の虫がなった、リゼの顔は真っ赤であった。

「リゼさんって案外食いしん坊なんですね……」

厨房にいる怜央はボソツと呟いた。

## 第6羽 小麦を愛した少女と小豆に愛された少女その

## 2

パン作り日の朝、怜央はいつも通りのランニングを終え、自室にいた。

「今日だよな、確かパン作りすんの」

勉強しながらそんな事を呟いている怜央の部屋のドアを叩く音がした。

「兄さん、パン作り始めるよ」

チノはエプロン姿で怜央を呼びに来たのだった。

「わかった、今行く」

「私達の他にココアさんのお友達も来てるけど大丈夫？」

チノの発言に怜央は震えた。

「俺、急に熱が出てきた」

「いいから行くよ」

「女の子だけでやった方が楽しいって」

「兄さん!!」

「……はーい」

ドアを開けるとチノと頭の上のティツピーが呆れた顔をしていた。

「そんな顔しないでくれよ」

「お前が悪いんじゃないよ」

「おじいちゃんの言う通りです」

チノとティツピーに色々言われながら怜央は渋々キッチンに向かうのであった。

キッチンには、リゼ、ココア、チノ、怜央、そしてココアが連れてきた友達が集合していた。

「同じクラスの千夜ちゃんだよー」

ココアが連れてきたのは茶色がかかった黒髪を長く伸ばした少女、名前は宇治松千夜という。

「今日はよろしくね」

「チノちゃんとリゼちゃんと怜央くん」

「怜央が初対面の人の前で逃げないなんてな」

リゼは怜央の方見ながら言った、しかし怜央の目には光がない。

「ゼイインウサギ、ゼイインウサギ、ゼイインウサギ」

「怜央が壊れた!!」

リゼが叫びながら怜央を揺すつてしていると千夜は不安そうにココアに尋ねた。

「私なにかやつちやつたかしら?」

「違うよ? 怜央くんはね人見知りか激しいだけなんだよ」

「すごい人見知りさんなのね」

「うん、でも仲良くなるとすごい優しい子だよ」

「あらそうなの、私も仲良くなれるかしら」

「千夜ちゃんなら絶対なれるよ!!」

2人がそんな会話をしていると怜央の意識が帰ってきた。

「俺は……今までなにを?」

「よくわからないことを叫んでいたぞ?」

「すみませんリゼさん……」

「怜央君落ち着いた?」

「ココアさんもすみません、それで千夜さん? でしたっけ今日はよろしくお願いします」

怜央は丁寧に頭を下げた。

「いいのよ、よろしくね」

千夜はそういうと不思議そうにティップーを見ながら

「さっきから気になっていたんだけど、そちらのワンチャン……」

「ワンちゃんじゃないです」

チノはキツパリ言った。

「この子はただの毛玉じゃないよ」

「まあ毛玉ちゃん？」

ココアはティツピーを撫でながら言った。

「もふもふぐあいが特別なの!!」

「癒しのアイドルもふもふちゃんね」

「ティツピーです」

「誰かアンゴラうさぎって品種だって説明してやれよ」

「誰も気にしてないからでしょうね」

「怜央は知ってるのか？」

「今知りましたよ？」

「今なのか!？」

リゼのツツコミに対して怜央は少しドヤ顔で答えたそしてまたツツコまれた。

調理台に食材と調理器具を並べていた。

「それにしてもココアがパン作れるって意外だったな」

「えへへー」

「褒められてないですよ？」

「まあ、普段からは想像つきませんけどね」

袖まくりをして、麵棒を持つココアは燃えていた。

「みんなパン作りをなめちやいけないよ！少しのミスが完成度を左右する戦いなんだよ  
！」

「ココアが珍しく燃えている……このオーラ……まるで歴戦の戦士のようなだ……」

リゼはココアの普段とは違うオーラに驚いていた。

「今日はお前に教官を任せた！よろしく頼む！」

「任されたよ！サー、イエッサー！」

リゼに教官を任されココアもノリノリだった。

「私も仲間に……！」

千夜は2人の輪に入ろうとしていた。

「中学の部活を思い出すな」

「暑苦しいです」

「それじゃあ各自パンに入りたい材料の提出ー!」

「イエッサー!」

「さっ、サー」

「暑苦しいです」

「そんなこと言わずテンションあげてこうよ」

各自が材料を取り出す。

「私は新規開拓に焼きそばパンならぬ焼きうどんパンを作るよ!」

「私は自家製のあずきと……梅と海苔を持ってきたわ」

「冷蔵庫にいくらと鮭と納豆とゴマ昆布がありました」

リゼはイチゴジャムとマーマレードの瓶を取り出しながらツツコんだ。

「これってパン作りだよな」

「味の組み合わせが絶望的な物がおおそうですね」

怜央は苦笑しながらタッパーを取り出した。

「それはなんだ?」



「昨日のカレーです、冷ましてからタッパに詰めておきました」

「怜央くんはカレーパンを作るんだね、だから昨日はカレーだったのかな？」

「はい、新メニュー開発が一応目的ですからね、新しいのに挑戦しないと」

怜央は内心すごく燃えていた。

（美味いカレーパンを作りたい!!）

「怜央まで燃えている！」

「兄さんもあっち側だった……」

「怜央くんもやる気だね！」

「まずは強力粉とドライイーストを混ぜて」

「ドライイーストって、パンふつくらさせるんですよね？」

「そうそう、よく知ってるねチノちゃんえらいえらい♪」

ココアは袋を一旦置くとチノの頭を撫でた。

「乾燥した酵母菌なんだよ」

「攻歩菌……!?!」

チノの顔はどんどん不安に染っていく。

「そ、そんな危険なものをいれるくらいならパサパサパンで我慢します」

「ドライイーストってのはパン作りには向いてるけど、糖分が多い方が甘いパンを作る

場合は生イーストを使うんですよね」

「怜央くんよく知ってるね！」

「怜央君は物知りなのね」

「一応今日のための予備知識かなと思って図書館とかで調べましたので……」

そんな会話をしながらココアはボウルにドライイーストを入れた。

「はい、ドライイースト」

「あつ……あ……あ……」

チノはドライイーストが入ったボウルを不安そうに覗き込んだ。

「ドライイーストが危険なものならパンには入れないでしょ？」

「そうだけど……」

怜央はチノを説得した。

材料を混ぜていくと生地がまとまり弾力が始まるそして生地が一つにまとまるとボウルから取り出し机の上でこねていく。

「パンをこねるのってすごく体力がいるんですね」

「腕が……もう動かない……」

「これくらい朝飯前だな」

チノは額に汗を浮かんでおり、千夜も腕を回している。怜央は余裕綽々といった具合

にパンをこね続けている。

「リゼさんは……平気ですよね」

「な、なぜ決めつけた……?」

「千夜ちゃん大丈夫?」

「!!いいえ大丈夫よ!」

「頑張るなあ」

「健気ってやつだね」

「少し違うような……」

（ココアに手間を取らせるわけにはいかないもの、みんなについていけるって事を見せなきゃ!）

千夜はまくった袖をさらにあげ気合いをいれた。

「ここで折れたら武士の恥ぜよ!息絶えるわけにはいかんきん!」

「健気?」

「この作業ってそんなにしんどいですか?というかななぜ武士の恥?」

パン生地をこね続けるとさらに弾力が増していく。

「そろそろいいかな?モチモチしててすごく可愛い♪」

「生地が?」

「すごい愛だ」

こね終えた生地をボウルに戻し、密閉してラップをしてタイマーをセットする。

「1時間ほど寝かせまーす」

「油の準備しとくか」

PIPPIPI……PIPPIPI

1時間が経ち、生地を確認すると、生地は膨らんでいた。生地を綿棒で伸ばし、各自が思う形に整えていく。

出来上がった生地を鉄板に並べて、オーブンを余熱する。オーブンの調節は経験者のココアがやっている。

「チノちゃんはどうな形にしたの？」

「おじいちゃんです」

「小さいころから遊んでもらってたので……」

「おじいちゃん子だったのね」

「コーヒーをいれる姿はとても尊敬していました」

「じいちゃんつてそっちか……」

孫に褒められ照れるティッピー。

怜央は鉄板の上にあるパンを見ながら、ティッピーでは無く人の顔が並べてあった。

「俺のやつはオーブンで温めないので大丈夫ですよ」

「カレーパンだったよな」

怜央のパンは焼く前の餃子のように真ん中の方が膨らんでいる。

怜央はパンを作るきつかけになった目を思い出し少しからかってみようと思った。

「食いしん坊のリゼさんにもあげますよ」

「誰が食いしん坊だ!!」

「冗談ですよ、冗談」

チノはこのやりとりを聞きながらパンの乗った鉄板をオーブンに入れた。

「……ではこれからおじいちゃんを焼きます」

「うわああああー!!」

「チノ、言い方……」

怜央は呆れながらツッコんだ。

「千夜さんちよつといい?」

「なに?」

「じゃじゃーん!千夜ちゃんにおもてなしのラテアート!」

ココアが渡したのはウサギの絵が書かれたラテアートだった。

「まあ!すてき!」

「今日は会心の出来なんだ」

「味わっていただくわね」

「ああ……」

ココアは千夜がカップに口をつけようとすると、ココアは残念そうな顔になる。千夜が顔をあげココアの方を見るとココアは笑顔になる。

「あああ……」

再び千夜がカップに口をつけようとすると、ココアは残念そうな顔になる。

千夜がココアの方を見るとココア笑顔になる。

「これが最後じゃないんですし、またいれてあげればいいじゃないですか」

「それもそうだね、さすが怜央くん」

ココアは少し残念そうな顔をしていたが、千夜はようやくカフェラテを飲むことが出来た。

「チノちゃんさつきからオープンに張り付きっぱなしだねー」

「じーっ」

オープンの中をじーっと見つめるチノ

「そんなに面白いかな？」

気になったのでリゼがチノの隣につく。

中では熱せられたパンが膨らんでいく様子が見える。

「どんどん大きくなっています。あつ！おじいちゃんがココアさんと千夜さんに抜かれました！リゼさんだけ出遅れています。もっと頑張ってください！」

「私に言うなよ……」

怜央は油と鍋を準備してコンロに火をつける。

十分に油が温まったところで揚げる準備をしているカレーパン達を鍋に入れる。

「カレーパン〜カレーパン〜」

「怜央は楽しそうだな」

「料理してる時って楽しいんですよね、美味しいって言ってくれる人の事を考えながら作るのだから」

怜央は手馴れた感じでカレーパンを鍋に入れながら楽しそうに暑く語った。

「兄さん暑苦しいです」

「すまん……」

「順調に揚がってるな」

「美味しそうだね！」

パンは焼き上がり、テーブルに並べていく。

「いただきます!!」

早速焼きたてパンの試食会が始まった。

怜央はカレーパンを揚げているのでこの場にはいない。

「美味しい！」

「フカフカです」

「さすが焼き立てだな！」

「これなら看板メニユーにできるよ！」

「この梅干しパン」

「この焼きうどんパン」

「この焦げたおじいちゃん」

「……どれも食欲そそらないぞ？」

看板メニユーにするにはインパクトはあれど微妙なラインナップである。

「じゃーん！ティップーパン作ってみたんだ」

「まあ！可愛い！」

「!!」

「看板メニユーはこれで行けそうだな」

「食べてみましょう」

「もちもちしてる……」



「えへへーおいしく出来るといいんだけど」

「わあ！」

「リゼちゃんの持つてきてきたイチゴジャムだよ、美味しいね！」

「……あ、ああ、でも」

（……なんかエグイな）

かじったところや目と口からはみ出すイチゴジャムが猟奇的な絵面を生み出している。

「カレーパン出来ましたよ〜」

「『『『おぉー！』』』」

怜央は笑顔でカレーパンが沢山のつてる皿を持つてきた。

「怜央くん！早速食べてもいい？」

「ぜひ食べてください」

「『『『いただきます』』』」

それぞれカレーパンを手に取り試食を行う。

「おぉ!!美味しいなこれ!!」

「美味しいわ！」

「怜央くん！これ美味しいよ！」

「美味しいです!」

みんなが美味しいと言ってくれることに怜央の口元が緩む。

「怜央くんが笑ってる」

「怜央が笑ってるのなんて初めて見たな」

「……あまり見ないでください」

怜央は顔を手で隠して、下を向いた。

「そんなに恥ずかしがることないのよ?」

怜央は埒が明かないと思ひ咳払いをして、話を変えようとした。

「それは置いておいて、ポリウムはどうですか足りないとか、なにか意見とかありますか?」

怜央はメモ帳とペン取り出しみんなに意見を求めた。

「ポリウムもあるし、これも看板メニューでいいんじゃないか?」

「男性客に人気が出そうです」

「私のティツピーパンと怜央くんのカレーパンで2大看板メニューだね!」

「好評のようで良かったんですが……」

「「「が?」」」

「コストと手間を考えると利益的な問題が発生しますしカレーが残った場合が……」

「確かにそうだな」

怜央は眉間に皺を寄せブツブツとなにか呟いてる。

「兄さん、お父さんと相談して決めましょう」

「それもそうだな」

後日タカヒロと相談した結果、1日の販売個数の制限と売る曜日を限定するというこ  
とで決まったのだった。

# 第7羽 小麦を愛した少女と小豆に愛された少女その3

パン作りを行った次の休日。

ココア達4人は、千夜の喫茶店に向かっていた。

「この辺りのはずなんだけど」

先日のパン作りの際に、

『パン作りでお世話になったお礼に、うちの喫茶店に招待するわ』

というふうにな夜の喫茶店に誘われたのだ。

「どんなところか楽しみだね」

「なんて名前の喫茶店なんですか？」

「あま……うさ……だったかな」

「甘兔とな!？」

「チノちゃん知ってるの？」

突然ダンディな声が聞こえるがチノの腹話術と言い張っているので、怪しまれること

は無い。

(え……今ので誰も何も思わないわけ？明らかに怪しいじゃん)

怜央は思ったが言うのは藪蛇な気がしたのでスルーする。

ココアはまだしもリゼにもばれていないので怜央はとても不思議にも思っている。

「おじいちゃんの時代に張り合っていたと聞きます」

「確かにじいちゃん、ババアがどうこうってよく店で言ってたな」

「……じやないのか」

「……みたいですね」

「看板だけやたら渋い……面白い店だな」

この町らしく外壁が赤く塗られた木組みの家には、年季の入った木製の看板がついてる。

看板には「庵兔甘」と書かれている。

「……オレ、うさぎ、あまい……」

「甘兔庵な」

「俺じゃなくて庵ですよ、ココアさん」

甘兔庵の扉を開き四人は中に入っていた。

「……んにちは——」

「あら、みんな！いらっしやい」

中に入ると着物にエプロンを付けた千夜が出迎えてくれた。

「あつ初めてあつた時もその格好だったね、お店の制服だったんだ」

「あれはお仕事でようかんお得意様に配った帰りだったの」

「あのようなかんおいしくて3本いけちやったよ」

「3本まるごと食ったのか!？」

「流石に健康に悪いですよね？」

「うさぎだ」

「置物かと思っただぞ」

「あんこはよっぽどのことがないと動かないのよね」

チノが近づくとあんこの視線がチノの上に乗ってるティツピーに向くとテーブルの上から、チノの上にいるティツピーに飛びつく

「じいち……、ティツピー!!」

「チノ!!」

「チノちゃん大丈夫!？」

チノが驚き尻もちをつく。

ココアが手を取りチノを立たせる。

「びっくりしました……」

「あのうさぎ……許さん……」

ティツピーは叩き落したあんこはそのままティツピーを追い回している。

「わあああー!!」

「縄張り意識がはたらいたのか？」

「いえ……あれは一目ぼれしちゃったのね」

「一目ぼれ？」

「恥ずかしがり屋くんだと思ってたのに、あれは本気ね」

千夜は笑顔で手でハートを作る。

「あれ？ティツピーってなんとなくオスだと思ってた」

「ティツピーはメスですよ」

（まあ中身は違います）

ティツピーは叫びながら店外へと飛び出していき、あんこもそのあと追っていった。

4人はテーブルに着くと、千夜が4人分の抹茶を持ってくる。

「私も抹茶でラテアートを作ってみただけど、どうかしら？」

「わっどんなの!？」

「ココアちゃんみたいにかわいいのは描けないんだけど、北斎様に憧れて……」

「浮世絵?!」

「なんでそんなに上手く描けるんですか……」

抹茶に描かれていたのはそれぞれ女性の顔と山、そして波の絵だが、浮世絵のようなタツチである。

「芭蕉様にも憧れて俳句もたしなんでいて……」

4つ目の抹茶には「ココアちゃん どうして今日は おさげやきん? 千夜」と書かれている。

「風流だ!!」

「俳句も上手ですね、あとメニューを頂けますか?」

「はい、お品書きよ」

千夜からおしながきを受け取ったりゼが開く。

内容を見た瞬間リゼは顔をしかめる。

「煌めく三宝珠……、雪原の赤宝石……、海に映る月と星々……、なんだこの漫画の必殺技みたいなメニューは……」

チノと怜央もわからないのか顔を見合わせて首を傾げている。

「わく抹茶。パフェもいいしクリームあんみつも白玉ぜんざいも捨てがたいなあ」  
「わかるのか!!」



(あくそういう感じなのね……)

怜央はココアの解読からヒントを得て察した。

「じゃあ私黄金のシャチホコスペシャルで」

「よくわからないけど海に映る月と星々で」

「花の都三つ子の宝石」

「輝く三宝珠2つでお願ひします」

「ちよつと待っててね」

メニニューを取り終えると千夜は厨房に向かう。

「和服ってお淑やかな感じがしていいねー」

「……」

「着てみたいんですか？」

千夜の後姿を視線で熱心に追うリゼの様子に気づく千夜。

「いやっそういうわけじゃっ……!」

「リゼちゃんならきつと似合うよ」

「そっ、そうか？」

「うん、すつごくカッコイイ」

「……」

「怜央とチノはココアとリゼのイメージには差があると感じたが黙っていることにした。」

「お待ちどうさまー」

「リゼちゃんは海に映る月と星々ね」

「白玉栗ぜんざいだっただのか」

「チノちゃんは花の都三つ子宝石ね」

「あんみつにお団子がささっています!!」

「怜央くんは輝く三宝珠を2つね」

「やっぱり三色団子だった」

「ココアちゃんは黄金の鯨スペシャルね」

「鯨IIたい焼きって無理がないか？」

「さあ召し上がれ」

「「「いただきます」」」

みんなで手を合わせて千夜が作った甘味を食べ始める。

「う〜ん♪美味しい〜♪」

「このお団子……桜の風味！」

「この三色団子美味しいな」

「あんこは栗ようかんね」

じー……

「どうしたの？」

「こつちのを食べたいんでしょうか？」

「あの目って……」

怜央は、あんこの目を見てあんこの狙いを察した……

「しようがないなーちよつとだけだよ、そのかわりあとでもふもふさせてね」

ココアはスプーンにアイスを乗せてあんこを誘うが、あんこは本体の器に一直線に向かうとすごい勢いで食べ始めた。

「本体まっしぐら!!」

「やっぱり本体狙いだったか……」

ココアの料理の大半を食べ尽くし、満足したあんこを千夜が台に戻す。

「それにしても、このぜんざいおいしいな」

「うちもこのくらいやらないとダメですね」

「もつと頑張らないとか……」

「それならラビットハウスさんとコラボなんでどうかしら？きつと盛り上がると思うの、コーヒーあんみつとか」

「タオルやトートバッグなんでもうかな」

「私マグカップ欲しいです」

（ん……………？）

（え……………？）

（料理の方じゃなくて？）

「「「ごちそうさまでした」」」

チノはあんこの方をじつと見ている。

「チノちゃん、あんこには触らないの？」

「あゝその事なんですけど……………」

「チノはティツピー以外の動物が懐かないらしい」

「怜央くんは大丈夫なの？」

「俺は特別懐かないとかは無いですね……………」

怜央は、チノが全く懐かれず、いじけてしまったチノを慰めた頃を思い出した。

怜央には、なぜチノが懐かれないが全く予想がつかない。意を決したチノが席を立ち、あんこに近づくと、

あんこはやはり微動だにしない。

チノが指先で恐る恐るあんこの耳に触れる。

「っ！」

あんこの耳がピクリと動いてチノはびっくりするが、やはり本体は動かないし逃げない。  
い。

次は背中をそつとゆっくりと撫でる。しかしあんこは動かないし逃げない。

さらに両手でゆっくり抱き上げ、あんこの顔に頬をこすりつけた。だがあんこは動かないし逃げようとしなない。

あんこに逃げないことを感じたのか最後は頭の上に乗せる。

「すごい……もうこんなに仲良く……！」

「頭に乗せなきや気がすまないのか？」

「クセになつてゐるんだと思います……！」

チノ以外が、やり遂げてドヤ顔をするチノを見ていた。

「じゃあそろそろお暇するか」

荷物をそれぞれ持つとテーブルから立ち上がる。

「みなさんまた来てくださいね」

「私の下宿先が千夜ちゃんの家だったらここでお手伝いさせてもらってたんだろうな」

着物の制服を着て千夜と2人で、働く姿を想像するココア。

「今からでも来てくれていいのよ、従業員は常時募集中だもの」  
「それいいな」

「同じ喫茶店ですしすぐ慣れますね」

「甘兎庵でも頑張ってくださいね」

「じゃあ部屋を空けて空けておくから早速荷物をまとめて来てね」  
「誰か止めてよ！」

トントン拍子に話が進んでいくので悲鳴をあげるココア。

「千夜ちゃんまたねー」

「ごちそうさまでした」

「またなー」

「今日はありがとうございました」

4人は甘兎庵を後にして帰路に着いた。

「昔はお店とライバルだったんだよね」

「今はそんなこと関係ないですけどね」

「実際今まで忘れてましたし」

「私たちもお客さんに満足してもらえるように頑張らなきゃね」  
「だなー」

(あれ……なんか物足りないような……?)

怜央はいつも聞こえてくるダンディな声が聞こえないことに違和感を感じた。

誰も気づいていないが、チノの頭の上に乗っているのがあんなのである。

「なんじゃこの栗羊羹!?!甘すぎるわ!甘すぎ甘すぎ!旨すぎ旨すぎ!甘すぎ甘すぎ!」

「あら……?」

その頃、ティツピーはなぜか甘兔庵の台で栗羊羹を頬張っていた。